

愛鳥の心が育てる
よい環境
57

先生方へ。生命を大切に教育を。

教科書のさし絵に見る自然観・環境観

ヨーロッパ諸国の初級教科書（日本では小学校の学年）をいろいろ見た方からこんな話をうかがいました。『お国柄で美しいカラー印刷だったり、質素な黒白の線画だけだったり、さまざまだったが、見ていくうちに、私たちが見られている日本の教科書とはひとあじ違うことに気がついた。野鳥がたくさん描かれて、しかも、鳥と子供がなかよく心をよわせている絵が多い。森の風景も、多いし、えさをやったり、巣箱をかけた、ヒナを巣に戻してやったり、龍を捕われた野鳥を放したり。ともかく野生の生命に対する思いやりの気持、愛情をひしひしと感ぜられた。』

さて、日本の初級教科書はどうでしょう。文部省の指導要領も何回か読み、教科書の絵も愛り。セトとり、トンボとり、自然のものを採集する絵が少なくなつたかわり、栽培植物、草花、昆虫などの絵が多くなりましたが、野生の鳥やけものはあまり描かれていません。野生の生物と人間との関係が、外国の教科書では現在の姿で描かれているのに、日本では昔ばなしの中の動物、動物園の動物というなたちでしか描かれていない、違うなといった感じがします。低学年の教科書の絵はその国の、その時代の自然に対する考え方をよくよく観て現わしている、と思わざるを得ません。

先行させた自然教育

ところで、新教育課程は昨年七月文部省から告示されました。審議会の各中では①人間性豊かな児童生徒を育てる、②ゆとりあるしかも充実した学校生活を送れるようにする、③国民として必要な基礎的・基本的な内容を重視する。の三つがねらいとされています。この指導要領の改訂の中で、私たちは②の項目に、自然教育・環境教育の今後、のありかたに深く関わりを見出すのでした。

問題、人間が対決しようとしている歴史上、最も重要な国際問題で、とくに日本では



財団法人日本鳥類保護連盟
サントリー株式会社

●鳥類保護は私たち一人ひとりを守るためのアローヘッド（Arrow-head）の標記です。自然の環境がこわされると、すぐには目には見えないけれど、野鳥が少なくなることは、やがてヒトも住めなくなる、身をもつて警告しているわけなのです。

●トリが生活できない環境では、ヒトも安心して暮らしができません。ヒトが健康で生活できる環境を守るためには、ヒトの住むところすべてに、たくさんのトリが安全にいられる静かで豊かな自然環境が必要です。

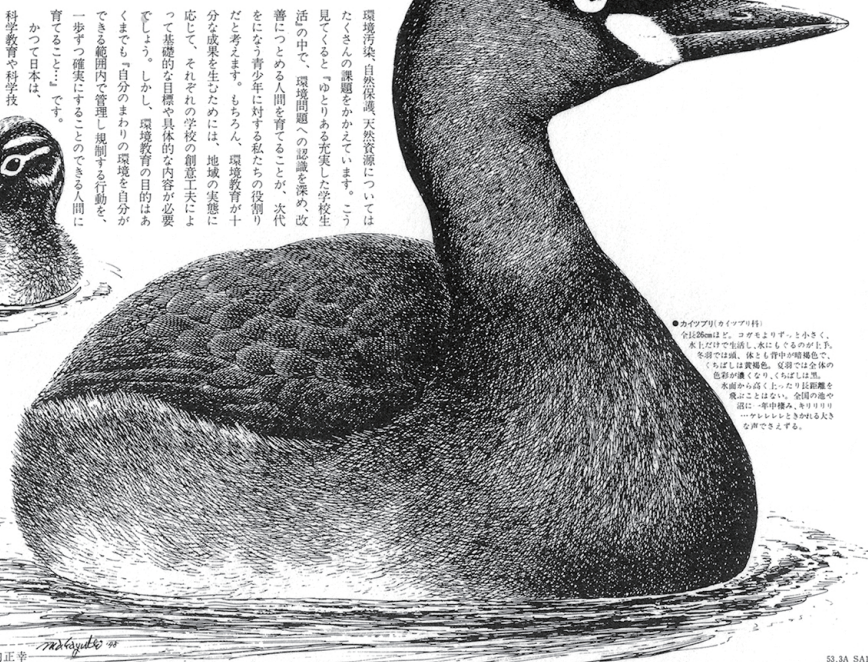
●私たちは愛鳥キャンペンをすすめているのは、トリの生命を守ることが、結局、ヒトの生命を守ることにつながる、そして、かけがえのない自然からの恵みをまもり育てようという社会環境づくりなのです。

●野鳥保護——自然保護は、自然の一員としてのヒトの義務であり、ヒト自身の生存と、生命への自覚と愛情をはぐくむための大きなテーマなのです。

●みなさまのあたたかいご理解とご支援をお願いいたします。

環境汚染、自然保護、天然資源については、たくさん課題をかかえています。こう見ると、と「ゆとりある充実した学生生活の中で、環境問題への認識を高め、改善につとめる人間を育てることが、次代をになう青少年に対する私たちの役割りだと考えます。もちろん、環境教育が十分な成果を生むためには、地域の基盤に定着して、それぞれの学校の創意工夫によって基礎的な目標や具体的内容が必要でしょう。しかし、環境教育の目的はあくまでも「自分のまわりの環境を自分ができる範囲内で管理し、規制する行動を、一歩ずつ確実に行うことのできる人間に育てること」です。

かつて日本は、科学教育や科学技術教育の進展に本腰を入れて努力を始めたとき、その中でも大きな要素を占めるはずの生命の理解や自然の保全の問題を無視してきまして、科学や技術の教育のすべてに先行するものは、実は人間として生命を大切にすることであり、自然と環境の教育だったのではないのでしょうか。美しい国土を破壊したり、生きものを意味なく殺す——それが近代文化だと思つてきた子供たちを育ててはなりません。



●カワグサ（カワグサ）は、水辺で生活し、水にも泳ぐのが上手。水の中では、体も背中が暗褐色で、くちばしは黒褐色。水辺では、体色が濃くなり、くちばしは黒。水辺から高く上ったり、距離を飛ぶことは少ない。羽の裏や腹に、半中腰、キリキリという音を出して、周囲の鳥を警戒する。

イラストレーション・森内正幸

52.3A SAIZ